

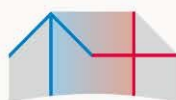
第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン ～誰もが能力を発揮し輝くために～

報告書

2023年10月14日（土）10:00～16:30

東京大学 弥生講堂・オンライン



EPMEWSE

一般社団法人 男女共同参画学協会連絡会

目次

第 21 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムプログラム.....	1
男女共同参画学協会連絡会第 2 1 期委員長挨拶.....	5
午前の部.....	6
午後の部.....	1 4
大坪久子先生メモリアルコーナー.....	4 0
ポスター発表参加一覧.....	4 1
シンポジウム写真.....	4 2
第 2 1 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム担当者・記録.....	4 5



第 21 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン

～誰もが能力を発揮し輝くために～

【日時】 2023 年 10 月 14 日（土） 10:00～16:30

【形式】 東京大学弥生講堂一条ホール & オンライン（Zoom webinar）開催

【主催】 一般社団法人男女共同参画学協会連絡会（幹事学会：一般社団法人日本生態学会）

【共催】 東京大学

【後援】 文部科学省、独立行政法人国立女性教育会館、一般社団法人国立大学協会、
一般社団法人日本私立大学連盟、内閣府男女共同参画局、厚生労働省、
経済産業省、国立研究開発法人科学技術振興機構、日本学術会議

【目的】

男女共同参画学協会連絡会が設立されて今年で21年となりました。

連絡会の活動では、およそ5年ごとの科学技術系専門職の男女共同参画実態調査（大規模調査）の合同活動に加え、各学会においては委員会やワーキンググループが中心となり、学会員を対象としたさまざまな取組がなされてきました。現在、加盟学協会はオブザーバー学会を含め、122となっており、今後さらなる広がりが見込まれます。そこで、本シンポジウムの午前の部では、お互いの学会の取組についての情報交換をあらためておこないたいと思います。各学会での取組の好事例や課題についてアンケートにより抽出し、各学会での課題解決のヒントとなる取組をご報告いただきながら、科学技術分野の男女共同参画の推進に向けてさらなる女性研究者支援の方策をみなさんと共に考えたいと思います。

加盟学会を見渡すと、フィールドワークを伴う研究分野も多数みられます。しかし、これまでフィールドワークならではの男女共同参画やダイバーシティ推進の課題は十分に共有されてきませんでした。遠隔地での長期間の調査では、ライフステージによって、研究と家庭生活の両立の課題は異なると考えられます。また学生の教育では、野外実習を行うことから、学生が躊躇せず参加できるような工夫や配慮が必須となります。そこで、本シンポジウムの午後の部では、考古学、地球惑星科学、生態学の方々から研究分野の特徴や魅力、課題や工夫などのお話を伺い、フィールドワーク研究分野で誰もが能力を発揮し輝くための方策について共に考える機会にしたいと思います。フィールドワークの分野以外の方にも、多くのヒントが得られるものと期待します。

■プログラム

【午前の部（10:00～11:30）】

開会挨拶 半場 祐子（男女共同参画学協会連絡会第21期運営委員会 委員長）

「男女共同参画活動のさらなる推進にむけて～加盟学会の好事例共有～」

担当：日本生態学会・日本応用数理学会

趣旨説明・加盟学協会のアンケートの結果

今井 桂子（一般社団法人日本応用数理学会）

加盟学協会の取組紹介

講演1 日本植物学会のダイバーシティー推進への試み

成川 礼（公益社団法人日本植物学会ダイバーシティー推進委員会 委員長）

講演2 日本技術士会の女性向け「技術サロン」紹介

飯島 玲子（公益社団法人日本技術士会男女共同参画推進委員会 委員長）

講演3 誰もが輝ける環境を目指して、～日本生理学会の試み～

志牟田 美佐（一般社団法人日本生理学会男女共同参画推進委員会 委員）

質疑応答・ディスカッション

【昼の部（11:30～13:00）】

ポスターセッション(昼食を含む)

【午後の部（13:00～16:30）】

幹事学会挨拶 宮下 直（一般社団法人日本生態学会 会長）

歓迎の挨拶 林 香里（東京大学 理事・副学長）

ご来賓挨拶

岡田 恵子（内閣府男女共同参画局 局長）

山下 恭徳（文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官）

「フィールドワーク分野のダイバーシティーとインクルージョン

～誰もが能力を発揮し輝くために～」

趣旨説明

生態学会員を対象にしたアンケート結果報告

宇野 裕美（北海道大学大学院地球環境科学研究院 学振特別研究員）

講演1 アンデス文明研究と多様性

瀧上 舞（国立科学博物館 研究員）

講演2 激変する極域：多様なアプローチの必要性

猪上 淳（国立極地研究所 准教授）

講演3 米国における女性科学者台頭の半世紀

北島 薫（京都大学農学研究科 教授）

休憩 14:50～15:00

パネル討論 15:00～15:50

パネリスト：瀧上 舞、猪上 淳、北島 薫、宇野 裕美

ファシリテーター：三宅 恵子（名古屋大学 特任講師）

休憩 15:50～16:00

各種報告・挨拶 16:00～16:30

- ・第21期活動報告 半場 祐子（男女共同参画学協会連絡会第21期運営委員会 委員長）
- ・WGからの報告
- ・次期幹事学会からの挨拶 今井 桂子（一般社団法人日本応用数理学会）

（お名前は敬称を略させていただきました。）

第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン ～誰もが能力を発揮し輝くために～

【日時】2023年10月14日(土) 10:00～16:30

【会場】東京大学弥生講堂一条ホール・
オンライン (Zoom Webinar)

★一般の方はオンラインでご参加ください
申し込みQRコードにて(10/8まで)



■プログラム

10:00 男女共同参画活動のさらなる推進に向けて～加盟学会の好事例共有～

開会挨拶 半場 祐子(第21期運営委員会 委員長)

担当: 日本生態学会・日本応用数学会

加盟学協会の取組紹介

成川 礼(日本植物学会ダイバーシティ推進委員会)

飯島 玲子(日本技術士会男女共同参画推進委員会)

志牟田 美佐(日本生理学会男女共同参画推進委員会)

質疑応答・ディスカッション

11:30 ポスターセッション(昼食を含む)

13:00 シンポジウム

幹事学会挨拶 宮下 直(日本生態学会 会長)

歓迎の挨拶 林 香里(東京大学理事 副学長)

来賓挨拶 岡田 恵子(内閣府男女共同参画局 局長)

山下 恭徳(文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官)

13:25 フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン

生態学会員を対象にしたアンケート結果報告

宇野 裕美(北海道大学 学振特別研究員)

講演1 アンデス文明研究と多様性

瀧上 舞(国立科学博物館 研究員)

講演2 激変する極域: 多様なアプローチの必要性

猪上 淳(国立極地研究所 准教授)

講演3 米国における女性科学者台頭の半世紀

北島 薫(京都大学農学研究科 教授)

15:00 パネル討論

パネリスト: 瀧上 舞、猪上 淳、北島 薫、宇野 裕美

ファシリテーター: 三宅 恵子(名古屋大学 特任講師)

16:00 活動報告

【主催】一般社団法人男女共同参画学協会連絡会

【共催】東京大学

【後援】文部科学省・独立行政法人国立女性教育会館・一般社団法人国立大学協会

一般社団法人日本私立大学連盟・内閣府男女共同参画局・厚生労働省

経済産業省・国立研究開発法人科学技術振興機構・日本学術会議

イラスト: 谷口裕美(東海大学)

【お問合せ】 第21期男女共同参画学協会連絡会事務局 danjo_office21@djrenrakukai.org

第 21 期委員長 挨拶

半場 祐子 氏

(一般社団法人 日本生態学会)

京都工芸繊維大学 応用生物学系/

バイオベースマテリアル学専攻 兼任 教授

シンポジウムの開催にあたり、幹事学会である日本生態学会を代表しまして、ご挨拶申し上げます。幹事学会としてシンポジウムを企画するにあたり、多様な年齢や性別、国籍をもつ 19 名からなるタスクフォース委員会で検討を重ねました。本日は、生態学会の特徴であり、一方で男女共同参画やダイバーシティ推進の課題がこれまで十分に共有されてこなかった「フィールドワーク」をテーマとするシンポジウム「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン～誰もが能力を発揮し輝くために～」を開催する運びとなりました。午前の部では、連絡会加盟学会の男女共同参画に関する取組についての情報共有を行います。男女共同参画の推進に向けたさらなる方策を、参加者のみなさんと共に考えたいと思います。午後の部では、フィールドワーク分野の 3 名の研究者から特徴や魅力、課題や工夫などのお話を伺い、パネル討論を行います。多様なバックグラウンドをもつ研究者が能力を発揮するための、多くのヒントが得られるものと期待しています。一般社団法人男女共同参画学協会連絡会は現在、正式加盟学協会 54 団体、オブザーバー加盟学協会 68 団体、計 122 学協会で構成されており、今後さらなる広がりが見込まれます。幹事学会は 11 月から日本応用数理学会様に交代となります。引き続き、男女共同参画学協会連絡会の活動へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

また、「無意識のバイアス」という概念を導入され、本連絡会の活動に多大な貢献をされた、大坪久子先生が今年 7 月にご逝去されました。先生のメモリアルコーナーをポスター会場に設置しましたので、ぜひ足をお運びください。

【午前の部】

「男女共同参画活動のさらなる推進にむけて～加盟学会の好事例共有～」

担当：日本生態学会・日本応用数理学会

- ・趣旨説明・加盟学会のアンケート結果
今井桂子（日本応用数理学会）

- ・講演 1

成川 礼（日本植物学会 東京都立大学 准教授）

- ・講演 2

飯島 玲子（日本技術士会 パシフィックコンサルタンツ(株) チーフコンサルタント）

- ・講演 3

志牟田 美佐（日本生理学会 東京慈恵会医科大学 講師）

趣旨説明
「加盟学会のアンケート結果」

今井桂子
一般社団法人 日本応用数理学会
中央大学理工学部情報工学科 教授

男女共同参画学協会連絡会が設立されて今年で 21 年となり、連絡会の活動では、およそ 5 年ごとの科学技術系専門職の男女共同参画実態調査（大規模調査）の合同活動に加え、各学会においては委員会やワーキンググループが中心となり、学会員を対象としたさまざまな取組がなされてきている。現在、加盟学協会はオブザーバー学会を含め、122 となっており、今後さらなる広がりが見込まれる。そこで、本シンポジウムの午前の部では、お互いの学会の取組についての情報交換をあらためて行うことにした。各学会での取組の好事例や課題についてアンケートを行い、それを基に、各学会での課題解決のヒントとなる取組をご報告いただきながら、科学技術分野の男女共同参画の推進に向けてさらなる女性研究者支援の方策をみなさんと共に考えることを目的として、2023 年 8 月 10 日から 9 月 2 日の期間に、正規加盟学協会とオブザーバー学協会を対象として、Google フォームによるアンケート調査を行った。全 122 学協会のうち、38 学協会から回答を得た。このアンケート結果について報告された。

1. 活動組織について

学会での活動組織の名称については、「男女共同参画」が 50%、「ダイバーシティ」が 38%となっていた。学会での組織の位置づけについては、「委員会」が 72%、「理事や役員などが担当」が 14%、「WG」が 8%となっていた。メンバーはどのように集めているか（複数回答）については、「声掛け」が 77%、「公募」が 8%、「選挙」が 3%となっていた。活動メンバーについての困りごと（複数回答可）については、「同じ人になってしまう」が 41%、「メンバーの活動意欲に差がある」が 31%、「人数が足りない」が 23%、「世代交代が進まない」が 15%となっていた。活動組織の位置付けやメンバーの確保についての困りごと（自由記述）については、女性会員が少ないため活発にならない、活動の継承が課題、活動が負担増になる、声掛けの難しさ、同じ人がやり続けることになる、学会全体で意識が低い、個人差・世代差があり、だれが適切かの判断が難しい、委員会の存在が知られていない、シニア層の意識改革の必要性と言った意見が挙げられた。活動組織の位置付けやメンバーの確保について、うまくいった事例（工夫）に関しては、アンケート、連絡会の活動紹介、年会でのシンポジウム、年会での男女共同セッションの設定といった地道な活動で認知度を高めた事例が見られた。また、委員会の報告時や学会時に女性登壇者や座長を

登用する、委員が理事会に参画する、退任した委員を「協力員」としたり、前会長を委員にしたりする工夫が見られた。

2. 活動内容について

学会での活動内容（複数回答可）については、「年次大会に実施するイベント（フォーラム、セミナー、交流会など）」が 71%と多く、次に「ML や Web サイトでの情報適用」が 58%、「年次大会とは別に実施するイベント（フォーラム、セミナー、交流会など）」が 26%、高校生や大学生を対象にしたキャリアセミナー（ロールモデルの紹介など）」が 21%となっていた。その他、国際会議・シンポジウムへの参加、連絡会の報告、団体の雑誌への投稿、アンケートの実施、託児所の設置や利用補助が行われていた。活動の困りごと（複数回答可）については、「フォーラムやセミナーのテーマや講演者を探すのに苦労する」が 42%、「活動内容がマンネリ化してしまう」が 26%、「フォーラムやセミナーの参加者が増えない」が同じく 26%、「学会員のニーズがわからない」が 24%であった。活動について、うまくいった事例（工夫）などについては、学会運営方法において、代議員の選挙の際に「多様な代議員の選出促進のお願い」をすることで女性比率を 30%程度に保てている、若手委員会との共同で活動する、ニュースレターで活動報告（活動の周知とアーカイブ）をする、各種アンケートの解析結果について和文誌で報告することで、うまく行ったという事例が見られた。また、学会やイベント運営については、オンライン会議、他学会との共催、若手研究者が多く参加または運営しているグループに情報発信することで参加者が増えたという事例があった。そして、年会時の活動については、ティータイム研究者交流会（子連れ交流会）、ランチョンセミナー、弁当の無料配布、男性も参加しやすいテーマにするという事例が見られた。

3. 大会時の託児室の設置について

託児室の設置担当（複数回答可）については、大会実行委員会が実施しているところが 63%、活動組織（男女共同参画委員会、WG など）が実施しているところが 32%、託児室は設置していないところが 21%であった。託児室の運用の困りごと（複数回答可）については、「利用人数の把握が難しい」（26%）、「託児業者を探すのに苦労する」（24%）、「利用者が増えない」（21%）といったことが挙げられた。託児室以外に子ども連れの研究者の大会参加をサポートする取り組み（自由記述）では、参加の方法について、同伴者パス、中高生の入場を許可する、子供同伴の場合の参加費旅費の補助、オンライン参加でも託児補助といった取り組みが見られた。会場の整備については、子供と利用できる休憩室、ファミリー休憩室を設置、小学生向けのイベントを開催といった取り組みが見られた。また、懇親会において、子供料金の設定、キッズスペース、情報提供（会場付近の託児施設、子供向け施設）といった事例が見られた。

4. 今後の協力体制

今後、協力できたらよいと思うもの（複数回答可）については、「大会時の託児室の設置実績の共有（会場、託児業者名、連絡先の共有など）」が61%、「連絡会の活動を紹介するスライド等の資料共有」が50%、「活動事例を共有するセミナー」が47%、フォーラムなどのテーマ・講演者の情報交換の場（担当者のオンライン交流会）」45%となっていた。

5. 感想や意見

感想や意見など（自由記述）では、他団体とのコラボ企画を行ってみたいという意見や、共有したいこととして、「好事例」、「他の団体の取り組み、特に女性会員を増やす取り組み」、「中堅から若手の男性会員が男女共同参画の活動に積極的に取り組める雰囲気づくりのアイディア」、「大会託児所の設置の効果（どのように活用されたか）」といったことが挙げられた。最後に連絡会への期待することとして、「女性会員が少ない学会における活動に対する理解」や「ジェンダー平等のために先進的な取り組み」などが挙げられた。

（記録：日本森林学会 久保田多余子）

講演 1

「日本植物学会のダイバーシティ推進への試み」

成川 礼 氏

一般社団法人 日本植物学会

東京都立大学大学院理学研究科 准教授

本講演では日本植物学会の男女共同参画・ダイバーシティの取り組みについて紹介された。日本植物学会は2023年9月現在で、総会員数1,800名強のうち、女性会員が30%程度（学生会員では約半数）の高い割合を占めている。

2010年に男女共同参画WGを設置すると共に、第1回の男女共同参画ランチョンセミナーを開催した。翌2011年に男女共同参画委員会が正式に発足した。更に性別のみならずキャリアパスやライフスタイルの多様性を推進するため、2020年に委員会名をダイバーシティ推進委員会に改称した。

主な活動は毎年9月の日本植物学会大会においてセミナーを開催することである。セミナーのテーマは、男女共同参画委員会の頃には、男女共同参画、育児と研究の両立を中心とすることが多かったが、改称後は、海外留学、アンコンシャスバイアス、SNS活用、および学会大会のあり方をテーマに外部講師による講演やパネルディスカッションを通して、話題提供と意見交換を行ってきた。セミナー後にはアンケートを実施し、後日、学会HPに報告書とアンケート結果や講演資料を掲載している。

委員会の委員は9名から成る。1名は学協会連絡会専門委員となっている。現在の委員長である成川氏は初の男性の委員長である。残り8名は任期4年の入れ替え制で2名同時に新旧が入れ替わる形としている。このため、新陳代謝が早い。性別比率は基本的に1:1とし、30-40代が中心である。また、日本の学会はダイバーシティという観点で、環境整備などが諸外国に比べて進んでいない傾向があり、海外で研究している方々と交流し、意見を取り入れていくことが肝心である。そこで、「海外交流委員」という委員（1年交代）を今年度から設定している。

また、本部・大会によるバックアップ体制も充実している。大会期間中に開催するダイバーシティ推進セミナーは、“ランチョン”セミナーとし、他の行事と被らせず単独開催にしている。お弁当を150個手配し、その費用は全て本部が負担している。このため、委員会側の開催コストが低く、委員はセミナーの中身に集中することができる。

（記録：日本森林学会 久保田多余子）

講演 2

「日本技術士会の女性向け『技術サロン』紹介」

飯島 玲子 氏

公益社団法人日本技術士会

パシフィックコンサルタンツ(株)経営企画部 チーフコンサルタント

本講演では日本技術士会男女共同参画推進委員会の活動について紹介された。技術士の登録者数（実人数）は 99,204 人、そのうち女性は 2,418 人（約 2.4%）、公益社団法人日本技術士会の会員数は 19,145 人、そのうち女性は 595 人（約 3.1%）である。

2008 年に日本技術士会の登録グループ「技術者をめざす女子学生を支援する会 WPETF」が JABEE 課程の女子学生向け懇話会を開始した。2011 年に男女共同参画推進委員会が設立され、現在の「技術サロン（技術者・技術士を目指す女子学生・女性社会人向け懇話会）」に発展した。年 4 回の開催を重ね、2023 年 9 月に第 59 回目を迎えた。このほか、大学や高等専門学校に出前講座も行って来た。

技術士に占める女性比率の少なさは、科学技術分野における女性のキャリアのパイプライン構築が途上にあることを示している。このことから、技術サロンでは、女性技術者のキャリアのパイプライン形成支援の一環として、働き方やワークライフバランスについてアドバイスをしたり、技術士取得に向けた意欲を高めたりすることを目的としている。

参加者は各回 10 名弱でスタッフ（委員・委員補佐）6～8 名程度の体制で開催し、アイスブレイクと技術士制度説明ののち、グループに分かれ質疑応答を行い、個別・具体の質問にその場できめ細かく回答できるよう努めている。参加者アンケートの結果は概ね良好であるが、改善すべき点を毎回確認している。また、主な質疑応答は「Q&A 集」としてとりまとめ、公表・配布している。

今後の課題は、より多くの方に参加いただけるよう「技術サロン」の開催頻度や開催主体を拡大することである。そのためには関連団体の活動との相互乗り入れなど連携が必要である。また、大学や高等専門学校の先生方を通じて女子学生に周知いただけるとありがたい。そして、技術サロン開催の効果をより高めるために、参加後のフォローの強化や「Q&A 集」の更新等が必要と考えている。

連携強化に向け、連絡会の皆さまとの情報共有の機会をいただけたことに感謝するとし、紹介が締められた。

（記録：日本森林学会 久保田多余子）

「誰もが輝ける環境を目指して～日本生理学会の試み～」

志牟田 美佐 氏

一般社団法人日本生理学会

東京慈恵会医科大学 講師

本講演では日本生理学会が行う男女共同参画の取り組みについて紹介された。日本生理学会では、女性会員数は増加傾向にあり、2009 年は女性比率が 16%（女性 453 人、男性 2420 人）だったのに対し、2021 年では 22%（女性 542 人、男性 1960 人）に増加した。学生会員と理事（評議員より選出）でそれぞれ 28.5%→41%、8.6 %→21.1 %まで上昇した。

日本生理学会での男女共同参画推進は、1995 年に設立された生理学女性研究者の会（WPJ）、1998 年に設立された若手の会、そして、2002 年に設立された男女共同参画推進委員会（以下、推進委員会）の 3 つの組織が担っている。WPJ は女性研究者のロールモデルの紹介と育成に、推進委員会は大会参加を促進させるためのライフイベント支援や、継続して研究を続けるためのシンポジウムの開催、若手の会は若手研究者のキャリア支援という、それぞれに特化した役割を持ちつつ連携している。本講演では特に WPJ と推進委員会の具体的な取り組みが紹介された。

WPJ は年二回のニュースレター発行、生理学会大会でのグループディナーやランチ会の開催、女性研究者のみで構成される学術シンポジウムの後援を行っている。また、2010 年に創設された、女性研究者に特化した入澤彩記念女性生理学者奨励賞（入澤彩賞）の選考も行っている。これまでに入澤彩賞を受賞した教授職以外の 9 名のうち 3 名が職位を上げている。

推進委員会は学協会連絡会との連携、啓発活動のためのシンポジウムの開催、大会会場内の託児所設置を担っている。大規模アンケートには第 1 回から関わり、2013 年の第 3 回大規模アンケート実施年には幹事学会を務めた。シンポジウムは毎回お弁当付きのランチョン形式で行っているため、50 名～100 名近くが参加する。託児所設置は、大会ごとに推進委員会が大会幹事事務局へ設置を依頼し、保育所の選定・運営は大会幹事事務局が行っている。2019 年からは、11 歳以上の小・中高生の居場所支援として待機専用室を準備した。待機専用室をより利用しやすい形にするため、2023 年にはポスター会場の休憩所の一角をフリースペースとして利用できるようにした。今後の支援を検討するために 2020 年に行ったアンケート結果では、回答者の男性の 62%（主な理由として育児が 28 %と勤務が 61 %を占める）、女性の 79%（主な理由は育児が 65 %と勤務が 23 %を占める）で大会参加を断念したことがあると回答したことから、育児支援の強化と勤務地で学会に参加できるハイブリッド型の開催継続が必要であると判断される。そして、2021 年には大会中の居住地域での託児・介護でのサービス利用費を補助するライフイベント支援が設置され

た。現在では18歳未満の帯同者の交通費支援を検討している。最後に、男女共同参画活動に奮闘している委員が紹介され、講演が締められた。

（記録：日本森林学会 久保田多余子）

【午後の部】

- ・第21 期幹事学会挨拶

宮下 直（東京大学 教授）

- ・共催者挨拶

林 香里（東京大学 理事・副学長）

- ・来賓挨拶

岡田恵子（内閣府男女共同参画局 局長）

- ・来賓挨拶

山下 恭徳（文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官）

「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン ～誰もが能力を発揮し輝くために～」

- ・報告

宇野 裕美（北海道大学 学振特別研究員）

- ・講演 1

瀧上 舞（国立科学博物館 研究員）

- ・講演 2

猪上 淳（国立極地研究所 准教授）

- ・講演 3

北島 薫（京都大学 教授）

- ・パネル討論

ファシリテーター

三宅 恵子（名古屋大学 特任講師）

幹事学会挨拶

宮下 直 氏

一般社団法人日本生態学会 会長

第 21 回の幹事学会を務めています日本生態学会を代表して、ご挨拶をさせていただきます。日本生態学会は会員数約 4,000 名で、女性比率は約 24%であり、理事会メンバーの三分の一を女性が占めており、男女共同参画がかなり進んでいる学会といえるのではないかと思います。

今回幹事学会を引き受けるにあたり、去年の冬ころだったと思いますが、タスクフォースを立ち上げました。会員皆さんに広くメンバーを募集し、若手中堅を中心に 10 名程度の方に応募していただきました。それからほぼ毎月会議を重ね、今日のシンポジウムの内容を検討してまいりました。その結果、「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン」というこれまであまり連絡会では扱われてこなかった内容を取り上げることになりました。実験科学とは違った新しい課題が浮き彫りになるのではないかと思います。皆さんの活発なご意見を頂ければ幸いです。

生態学は生物多様性、バイオダイバーシティがどのような仕組みで維持されているか、また自然と人が共存する道をどのように考えたらよいかを解き明かす学問分野です。生物多様性はそれ自体、内在的な価値があることは知られていますが、私たちの日々の暮らしにも多様性がもたらす恩恵が非常に重要なものであることは学問的にも示されています。同じようなことが人間社会の多様性についてもいえると思います。いろいろな意味で先行きが不透明な時代に、持続可能なレジリエンスの高い社会を作っていくうえで、ダイバーシティとインクルージョンが大きな鍵を握っていると言っても過言ではないと思います。そのような意味からも、今日のシンポジウムが何らかの貢献ができればよいと思っております。活発な議論をよろしくお願いいたします。

(記録：日本応用数理学会 今井桂子、中口悦史)

歓迎の挨拶

林 香里 氏

東京大学 理事・副学長

ようこそ東京大学にお越しくださいました。東京大学でダイバーシティ・国際担当理事・副学長を務めております林香里です。

第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムの開催、誠にありがとうございます。昨年に引き続き、東京大学での開催の運びとなりましたことを大変光栄に存じます。このシンポジウムは、第21幹事学会日本生態学会の皆様、並びに男女共同参画学協会連絡会の関係者の皆様、そしてご臨席の皆様、Zoomで参加されている方、ご協力を頂きました関係者すべての皆様のご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。開催にあたりまして、東京大学を代表いたしまして、歓迎のご挨拶をさせていただきます。

本日、このシンポジウムの前に、男女共同参画学協会連絡会の名誉会員であられました、大坪久子先生のメモリアルコーナーに立ち寄らせていただきました。大坪先生には学協会連絡会の創成期より自然科学分野において男女共同参画の推進、女性研究者の活躍、そして支援に多大な貢献をされてこられたのだと改めて実感しました。本学の保育園の創設にご尽力を頂きましたし、アンコンシャス・バイアスの啓発をはじめ、学協会連絡会のジェンダー平等推進中心メンバーとして先駆的な活動をリードされたと伺いました。2017年に大坪先生が作成されましたリーフレット「無意識のバイアスを知っていますか？」を東京大学でも大いに活用させていただいております。これを基に「無意識のバイアス」確認シートを作成し、今年度、全部局に配布しました。各部局において人事選考の場面を始め、日常の意識啓発の場面において活用しております。私がこの場でスピーチができることも、大坪先生を始めとする先輩の女性方の大きな努力の賜物であると、まさにこれも科学のモットーである「巨人の肩に立つ」というフレーズがふさわしい瞬間だと感じ入っております。

歓迎の辞に際しまして、本学の男女共同参画の取り組みをご紹介することをご要望頂きましたので、本学でも先達の下に立って私が理事・副学長の就任以降始めました取り組みについて、この場をおかりして紹介させていただきます。

東京大学では2022年6月にダイバーシティ&インクルージョン宣言を制定し、その精神のもとで活動を展開してまいりました。令和4年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー型）」にも採択されております。私どもは、この事業を「UTokyo 男女+協働改革 #WeChange」と名付け、「東京大学を変える」という強い思いで取り組んでいます。本事業の取り組みを始め、東京大学全学を挙げてジェンダー平等を推進すること表明し、本年度も活動に注力しています。本学の男女共同参画事業は、担当理事の下にダイバーシティ教育担当の副学長、そして副学長を兼務す

る男女共同参画室長、副室長 2 名、さらに室には 4 つの部会があり、部会長を中心に事業に取り組んでおります。また、事務方として、ダイバーシティ推進課も置かれております。

「UTokyo 男女+協働改革 #WeChange」では 3 つの目標を立てています。目標 I は「男女+協働改革」への基盤整備でマジョリティ側の意識改革、目標 II は大学院生からシニアまでのシームレスな女性研究者キャリアアップ支援、目標 III は女性教員の加速的増加となっています。それぞれの目標に対応して、意識改革、女性活躍支援、女性採用増加という 3 つの行動計画が相互に関連し、好循環を生み出す仕組みを目指しているところです。

しかし、何といても、本学では改革を実現するためには大学のすべての構成員の理解が不可欠ですから、マジョリティ側、すなわち日本人男性の意識改革が急務となっていると考えます。したがって、これを目標の 1 番目に置き、担当副学長のもとで全学的に進めています。昨年度は最初の教材として、ジェンダー・バイアスをテーマとした教材を開発し、9 月から全教職員が受講する研修を始めました。また、人事選考委員会が活用することを想定した「無意識のバイアス」確認シートを作成し、各部局に配布しました。学生を対象としたジェンダー・ジャスティス啓発としては、マイクロ・アグレッションへの注意喚起などを内容とした動画を作成し、新入生のガイダンスで活用しました。また、学部 1、2 年生向けのジェンダーやダイバーシティに関するオムニバス形式の講義を開講し、教養学部では新入生に D&I ビデオも研修として提供しています。

目標 II は女性研究者向けのキャリアアップのために取り組んでいます。大学院生や若手研究者への研究成果発表支援、助教や准教授、教授と進むキャリアパスに寄り添ったリーダー研修、将来の大学管理職育成のための研修なども予定しています。また、「女性研究者育成の課題と方策：欧米での経験に学ぶ」と題した FD セミナーも開催し、ハーバード大学とオックスフォード大学から講演者も招き、大きなシンポジウムを開催しました。

目標 III は女性教員の加速的増加を目指す数値目標です。総長のリーダーシップのもと、2023 年度の女性役員は 11 名中 4 名になりました。しかし、現場の女性教員や女性学生の割合は低迷しています。この部分の増加をどうやって取り組むかが大きな課題となっています。本学では、大学教員における女性比率を 25%以上にすることを目標とすると発表しました。昨年、メディアでは 300 名の女性教員が採用されるということが大きく取り上げられましたが、これはようやく 25%に手が届くかどうかという数字であり、大学全体の規模からするとそんなに大きな数字ではありません。まだ道のりは長くこれからが勝負だと思っています。東京大学の本部としては各学部や部局に女性採用に取り組んでもらうために、女性教授や准教授の雇用経費の直接支援策などを講じています。2022 年度はこの規模を倍増しました。さらに、女性教授や准教授を増やした部局への若手女性教員雇用費支援する制度も増設して実施中です。こうした支援策は、「部局女性人事加速 5 カ年計画」を基に実行しています。各部局は現状把握をした上で、5 カ年計画を作成し、それを全学で共有することになっています。このように、まずは女性採用のための人事計画をすべての部局で開示してい

ただいたこと自体が大きな成果であると考えます。今年度は私と副学長 2 人が各部局を訪問し、部局長に直接ヒアリングをし、現場の努力を激励しています。

また、本事業の取り組みを内外に情報発信をし、皆様のご理解を得て、大学だけではなく、社会と共に進む努力をしているところです。

2023 年度も WeChange というモットーを基に、東京大学を変える、そして私たちも変わるという思いで事業を推進しております。本日のシンポジウムはまさにこうした私たちの精神に合致する内容だと拝見いたしました。学术界を始め、日本社会のジェンダー平等の実現につながることを心から願い、実り多きものになりますよう、心から祈念を申し上げて私からのご挨拶とさせていただきます。

(記録：日本応用数理学会 今井桂子、中口悦史)

来賓挨拶

岡田恵子 氏

内閣府男女共同参画局 局長

内閣府男女共同参画局局長の岡田でございます。この度は第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムが開催されますことを心よりお喜び申し上げます。本日までご参加の先生方皆様が、それぞれの立場で科学技術の分野で男女共同参画の推進に取り組んでいただいていることに感謝申し上げますとともに、第21期の幹事学会であります日本生態学会の皆様を始め、すべての皆様のご尽力に敬意を表します。

科学技術分野におきまして、日本の研究者に占める女性の割合は諸外国と比較して低く、特に自然科学系、工学系への女性の進学者の割合はOECD諸国の中でも最下位です。こうした中で、今回のシンポジウムがさらなる女性研究者支援のために、フィールドワーク研究分野において、お一人お一人が能力を発揮し輝くための方策について議論なさるということは大きな意義があるものと考えております。政府としては、企業における女性登用の加速化などを通じた女性活躍の機運醸成と、ライフイベントとキャリア形成を両立できる環境づくりを両輪で進めることによりジェンダー平等の諸課題を解消し、令和の時代にふさわしい、男女ともに希望に応じてキャリア形成ができる社会を実現するために、本年6月13日に「女性版骨太の方針 2023」を策定いたしました。この「女性版骨太の方針 2023」では、科学技術・学術分野における女子生徒等の進学者を増やすことに向けた取り組みを推進するとともに、こうした分野における女性登用の促進を図ることとしております。具体的には女子中高生のみならず、保護者や教員を対象として、大学、企業の双方からロールモデルを提示し、ロールモデルによる出前授業を実施すること等により、理系選択者の増加に向けた取り組み等を行うこととしております。関係省庁においても、ライフイベントと研究との両立や女性研究者リーダーの育成を一体的に推進するダイバーシティ実現に向けた大学等への取り組みへの支援を行い、政府一体となって科学技術・学術分野への進学者を増やすことや女性登用を進めることとしております。

男女共同参画局における理工系分野への取り組みについても紹介させていただきます。当局では女子中高生などが理工系分野に興味、関心を持って将来の自分をイメージして進路選択することを応援するために、理工系の進路を選択することのメリットや理工系分野のキャリアに関する情報発信する取り組みを「理工チャレンジ」、略して「リコチャレ」として推進しております。特に毎年、夏休みの時期には文部科学省と協力し「夏のリコチャレ」と称しまして、取り組みに賛同される全国の企業、大学、自治体などの団体が多くのイベントを開催するキャンペーンを実施しております。今年の夏のリコチャレでは96団体により162のイベントが開催され、多くの女子中高生などが理工系の進路に触れる機会を作ることができました。また、理工系分野で活躍しておられる女性がロールモデルとして理工系の魅

力を伝え、女子学生の理工系選択を応援する STEM Girls Ambassadors への取り組みも行ってきました。

さらに「女性版骨太の方針 2023」にも盛り込んでいますが、人口の少ない、例えば 5 万人未満の地域において、その地域の若手のロールモデルによる出前授業についても新たに始めております。こうしたことを始めとして女性の理工系分野への進路選択を応援する取り組みを充実しております。

内閣府といたしましては、今後も関係省庁と連携して、こうした女子中高生等に対する理系進路選択の支援を進めますとともに、科学技術・学術分野における幹部や管理職への女性の参画拡大、また女性研究者、技術者の活躍できる環境の整備などによりまして、理工系女性人材の裾野の拡大と女性登用の促進をしてまいりたいと考えております。

最後に皆様の一層のご活躍をお祈り申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

(記録：日本応用数理学会 今井桂子、中口悦史)

来賓挨拶

山下恭徳 氏

文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官

文部科学省科学技術・学術政策局で総括官をしております、山下です。本日はお招きいただきましてありがとうございます。

本シンポジウムの開催にあたりまして、文部科学省を代表いたしまして、私からも一言ご挨拶を申し上げさせていただきます。本日、ご出席の皆様におかれましては、日頃より女性研究者の活躍促進に向けご尽力を様々な面で頂いておりまして心より感謝を申し上げます。現在様々な社会課題を抱える我が国におきまして、国民一人一人が能力を最大限に発揮し、活躍できる社会環境を整備していくことが必要であり、そうした観点から国としても女性の活躍促進を図っていくことが重要であると考えています。科学技術・学術の分野におきましては我が国の研究力の強化を図ることが一つの大きな課題となっておりますが、とりわけ様々な視点や優れた発想を取り上げることで、研究の多様性の向上を図り、科学技術イノベーションを活性化していくためには、女性研究者の登用と活躍促進に向けた環境の整備が非常に大きな課題であると認識しています。

我が国の民間企業を含む女性研究者の割合は令和3年度におきましては、17.8%であり、例えばイギリスでは40%程度、アメリカでも34%という数字で、それらの諸外国と比較しまして、依然として低い水準となっております。また、令和5年6月に策定されました統合イノベーション戦略2023におきましては、引き続き出産、育児というライフイベントと研究を両立できる環境の整備や女性研究者の活躍促進など研究環境のダイバーシティ実現に向けた大学等の取り組みを支援し、さらに指導的立場を含めた女性研究者のさらなる活躍の促進に取り組むこととされているところです。

このような状況も踏まえまして、文部科学省といたしましては、平成27年度以降、ダイバーシティ環境実現イニシアティブ事業を実施し、出産や育児等のライフイベントと研究が両立できるようにするための環境整備等に取り組む大学等を重点的に支援しております。また、学術振興会の特別研究員RPDの制度におきまして、子育て支援や学術分野における男女共同参画の観点から優れた若手研究者が出産・育児による中断後に円滑に研究現場に復帰できるように支援をしているところです。

加えて、前職では高等教育局というところに在籍しており、そのときに総理直轄の「教育未来創造会議」が運営されておりました。その第1次提言は大学の理工系を中心とした自然科学分野の充実にかかわるような内容でして、その中で自然科学系特に理工系分野における我が国の女性の進路はOECD平均よりも随分低いということが指摘されておりました。15歳、16歳くらいの段階だと国際的な学力調査の中では、男女で数学や理科における学力面での差異は殆どないという結果が出ています。ところが、高校での進路選択とい

うときに自然科学、特に理工系の選択が少なく、そのような分野への女性の進出を加速していかなければならないという提言も出されております。そうしたことを踏まえて、研究分野のみならず、学生の進路、大学の受け入れ、そのための入試制度、という観点からいろいろな議論が進みつつあるという状況だと思います。

このような様々な動きも踏まえ、女性研究者の活躍促進に向けた研究環境の整備にこれからも引き続き頑張って進めていきたいと考えております。本日までご出席の皆様の引き続きのご理解とご支援を頂きますよう、よろしく申し上げます。

最後に、本シンポジウムの開催にあたりまして関係者の皆様のごこれまでのご尽力に深く敬意を表しますとともに、本日までご参加の皆様にとってこのシンポジウムが実り多きものとなることを祈念致しまして、私からの挨拶とさせていただきます。

(記録：日本応用数理学会 今井桂子、中口悦史)

趣旨説明

半場 祐子氏

男女共同参画学協会連絡会第 21 期運営委員会 委員長

開催趣旨を説明します。午前中のセッションでの説明とも重複しますが、日本生態学会はフィールドワークをする研究者が非常に多い学会です。学協会連絡会に加盟されている学協会の中にもフィールドワークをされる方もおられますが、全体の中での割合は決して多くないということもあり、これまでフィールドワーク特有の課題や男女共同参画に関するさまざまな問題が十分に共有されてこなかったという問題意識があります。生態学会では、そこをクローズアップして、年齢も 30 代から 70 代まで、国籍もイランや中国も含め、性別もさまざま、多様なバックグラウンドを持つ 19 名のタスクフォースを作り、15 回にわたって検討を重ね、このシンポジウムを開こうということになりました。フィールドワークならではの課題を抽出するべく、生態学会の会員に限定したアンケートを行いましたので、その結果を冒頭に報告します。引き続いて、考古学、地球惑星科学、生態学の研究者からそれぞれの研究分野の魅力、工夫、課題などについてお話を伺います。その後、パネルディスカッションを開きます。そこではフィールド分野に限らず、誰もが能力を発揮し輝くための方策について考える機会になればと思っています。本当に多様なバックグラウンドをもつ研究者にパネリスト、スピーカーとしてご登壇いただきます。このシンポジウムが実り多きものになるように願っております。

(記録：日本応用数理学会 中口悦史、磯島 伸)

報告

「生態学会員を対象にしたアンケート結果報告」

宇野 裕美 氏

北海道大学大学院地球環境科学研究院 学振特別研究員

会場にはフィールドワークの経験のある方が2割ほど、8割の方は経験がないということで、まずはフィールドワークがどういうイメージのものなのか、講演者自身の経験から紹介する。フィールドワークは、研究室の外に出て、野外でデータをとったり、アンケートをしたり、研究室を飛び出して行う調査研究のことである。

私は典型的なフィールドワーカーで、河川生態学の研究をしている。世界中で自然の残った川に出かけて、魚を獲ったり、エビを獲ったり、虫を捕ったりして、川の生態系の成り立ちについて調べている。調査地も日本の北海道からアメリカ、インドネシアとさまざまなおところにあって、場合によっては日帰りの調査を行ったり、一週間単位、場合によっては数人〜十人以上のメンバーで寝泊まりを共にしたりしながら長期の調査を行うこともある。私は京都大学で学位をとり、大学院はアメリカに行った。現在は日本学術振興会の国際競争力強化特別研究員となって、再びアメリカで研究をしていて、今日も調査を兼ねて帰国していて、また明日アメリカに戻る。結婚していて、夫は同期の生態学者で、同じく海外を飛び回っていて、10年以上付き合っているが同じ国にいたのは1年くらいである。

フィールドワークは楽しいが、男女共同参画やライフワークバランスの面では課題が多い研究分野である。しかし女性が意外と多い。一体どうやってそれをやりくりしているのかということも含めて、みなさんに聞いていただきたい。

今回のアンケートは先月、オンラインで実施した。生態学会の会員は、約半数のメンバーが年間31〜90日のフィールドワークを行なっている。一人では危険なので、複数人で予定を調整して行なっている。半数が基本的に宿泊を伴った調査を中心とした研究を行っている。

まずは体力的な問題やハラスメントについて。フィールドワークは野外で行うため、体力的に大変なことがあったり、複数人での調査のため、自分一人の体力的な都合だけで予定を変えにくかったり、一緒に寝泊まりをしていると、炊事などを一緒にする必要があって、ハラスメントの可能性はある。

体力的な面については、女性では90%、男性でも70%が、体力的なことが研究活動の妨げになったことがあるということがわかった。女性特有の課題として、85%が月経が研究活動の支障になった経験があり、低用量ピルを利用する、調査計画を考慮するなど、さまざまな工夫をされていることがわかった。そういった課題があったとき、リーダーに体力的な困難さを言い出せずにいる女性が多いということが、男女共同参画的な面からの課題であることがわかった。特に月経のことは男性リーダーには言い出せない、女性が少ないこと、な

どから引き起こされる問題かと思われる。

さらに、ハラスメントの問題も切り離せない問題である。身体的なセクシャルハラスメントを見聞きしたことがあるという回答が過半数に上った。昔よりはマシなのではという声もあったが、実際にセクハラが原因で研究室に居られなくなってキャリアを断念したということも多く、周りの人が止めることが大切という声が寄せられた。ほかに性的な役割分担、例えば炊事は女性に、肉体労働は男性に依存してしまうなどで、嫌な思いをしたことがあるという回答も高い割合で見られた。また、そういった可能性を先輩から聞くことによって、フィールドワークへの参加を躊躇、断念したことがあるという女性はやはりかなり多く、参加したいといった時に女性が一人だった場合、止めておけばと親に言われるといったことが、この分野への進学自体への妨げになっている可能性がある。

次にライフプランとキャリアの両立について。20代後半～30代に博士の学位を取る人が多く、30代で任期付きのポジションを重ねて、ようやく研究者になれるかどうかという頃に、結婚、出産というライフイベントが重なる。大規模アンケートでも見られたが、女性の40代～50代の未婚率が非常に高い。さらに、キャリアを優先するためにパートナーとの同居を諦めたことがあるということが男性も女性も割合が高い。同居の見込みが立たなかったために婚約を破棄したり離婚したりすることになった、こういった問題からキャリアを断念した、という話も多く聞かれた。特に任期付きのポストの場合、同居の目処が立っても任期が切れたら探し直しなど、悲鳴が聞こえてきた。

子供の数の話となるとさらに問題は深刻で、任期のない定職につかなければ安心して出産できない、定職に就いた頃には、特に女性は体力的な限界もあって子供が多く作れない、といったコメントもあった。子供を産んだ後も、女性の方が子供連れでの研究がやりづらくなっているという結果が見て取れる。ただ男性の方でも、世代によって結果が違っていて、60代では割合が低く、若くなるに従って傾向が変わり、20代～30代の男性は女性と同等に子供の存在が研究のやりづらさに繋がっていると回答していて、女性だけでなく若い男性にもこういった課題が影響していることがわかる。

フィールドワークはさらに、子供がいると難しくなってくる。ライフステージの変化を機に研究アプローチや研究対象が変わったかという設問に対して、子供がいる場合、特に女性の場合は97%が該当すると回答した。野外の研究を中断せざるを得なかったためキャリアを断念せざるを得なかったという声も聞かれた。ただし、学会員を対象としているため、本当にすでにキャリアを断念した方は含まれないので、過小評価になっている。実際、子供がいる女性の場合は男性や子供のいない女性に比べて、宿泊を伴う調査を行う研究者の割合が低く、子供がいると宿泊を伴う調査が難しくなるという実態があることがわかった。

ライフプランとキャリアの両立について、その影響の両面性も見えてきた。両立の困難さを理由にキャリアを断念したのが、女性では31%、男性でも20%、逆にキャリアのためにライフプランを躊躇したことがあるのも、女性では75%にのぼり、男性と大きく開きがある。どちらの方向にも影響が起こりうるという両面性を考える必要がある。この結果は男性

では年代によって結果が違って、世代間の感覚の違いも考慮していく必要がある。現代の日本の社会では年配の男性がリーダーシップを発揮することが多く、女性や若手男性が理解されにくいという現状があるのではないかな。

最後にダイバーシティの価値と難しさについて。現在も多く留学生が来日しているが、留学生にも男性と女性がいて、男女共同参画の課題も違っていることもある。また性別も男女だけでなく LGBT など複雑化している。ダイバーシティ全体を捉えて、その価値と難しさについてもアンケートをとった。ダイバーシティの良さと難しさの両面を感じている。良さとしては、雇用してみると女性の方が意外と優秀だった、多様な方が研究室がよく回る、単純に楽しい、といった声が聞かれた。一方で難しさとしては、気を遣って大変、何を考えているかわからない、そもそも言葉の壁があって研究室の運営が大変すぎてたまらない、制度としてのサポートが足りていないことにも起因する難しさを挙げる方が多かった。一方でフィールドワークは人と人が密に関わる場なので、研究活動を通して自分と異なる属性の人への知識や理解が深まったという回答が非常に多く、フィールドワークを通して多様な人とのコミュニケーション能力が磨かれた、さまざまな国の人と接することによって、ベビーシッターの利用などにも積極的になれた、などの意見があった。さまざまな国と接するフィールドワークだからこそ、先進的な考え方もあるということが見えてきた。男女共同参画に対してもダイバーシティを進めていくことが刺激になっていることもあるようだ。

(記録：日本応用数理学会 中口悦史、磯島 伸)

講演 1
「アンデス文明研究と多様性」

瀧上 舞
国立科学博物館 研究員

瀧上氏は片道 3 日かかる南米アンデス地域へ調査やワークショップに行くような研究生を送っているが、パートナーと 2 歳の子供一人がいる 30 代後半の研究者である。通勤に片道 2 時間かかるため、職場には 10 時～16 時半しか滞在できず、十分に仕事時間を取れていないと感じているそうである。ただし、これはフィールドワークを続けたいという強い希望で、普段は通勤時間がかかるのと引き換えに両親と義両親の徒歩圏内に住んでいるためである。フィールドワーク中は最短でも 10 日間、コロナ禍前には最長で 60 日間と、長期に家を空けることになるが、留守の間は双方の親に頼っているそうである。ご両親も研究業界に関わっていたため、若手研究者の現状や、海外に行くことにも理解があり、煩いことを言われなかったのも非常に恵まれていたとのことである。パートナーも工学で博士を取って企業の研究者をしており、アカデミック業界のことを理解しているそうだ。

学部では地球惑星科学、修士・博士で先端生命科学、ポスドクからは人文社会科学と歴史民俗博物館、現在は科学博物館の人類研究部に所属しており、ひとりダイバーシティ研究者ともいえる経歴を持っているが、専門分野は古人骨の科学分析が軸となっている。瀧上氏の専門であるアンデス文明は文字を持たない文明であり、科学分析をするほど新しい面白い情報に触れられるということに大変興味を惹かれ、古代文明を科学の視点で読み解きたいという動機で修士からこの研究を行っているとお話された。

続いて、アンデス地域の環境を紹介された。アンデス文明は南米大陸のアンデス山脈の周辺で栄えた文明で、北はエクアドル、コロンビアから南はチリ、アルゼンチンにかかる広範な地域に影響を及ぼした。この地域は中央にアンデス山脈があることで、非常に多様な生態環境を持っている。太平洋岸地域は寒流のために非常に乾燥した砂漠環境になっている。山麓付近は緑豊かな農耕牧畜に適した環境になっているが、4000m を超えると冷涼で乾燥した環境になり、リャマやアルパカの飼育やジャガイモなどの塊茎類の栽培が中心となるような、食資源の限られる環境が広がる。山脈を越えると高温多湿な熱帯雨林のアマゾンが広がる。このような多様な生態環境をどのように活用して安定的な食糧資源の供給を獲得して文明社会が形成されたのか、アンデス地域における人類と自然の関わりを地球科学的手法で探求するため、アンデス文明の研究をしているとのことである。瀧上氏は特にトウモロコシ利用の時代変遷、リャマ・アルパカの飼育の拡大、海産物の内陸での利用といった、昔の人の食資源に注目した生活史復元を古人骨・古獣骨の分析から行なっているそうである。

フィールド調査では、現地の遺跡に行き、考古学者が発掘した骨を動物考古学者や形質人類学者とも一緒に相談ながら、破壊分析に供せる骨をサンプリングしているそうである。輸

出申請を終えて日本に持ち帰った試料から、骨コラーゲンや歯のエナメル質部分の分析を行うとのことである。現地ではペルー人考古学者、学生、あるいは調査隊に雇用されて発掘や土器洗いを手伝ってくれる村の方々とも触れ合いながら、多国籍な生活環境で共同研究を進めていると写真を交えて紹介された。

古人骨から昔の人の生活史を復元するには同位体分析が実施される。食物が光合成回路の違いや栄養段階の違いによって異なる炭素窒素同位体比を持つグループに分かれることを利用し、瀧上氏は紀元前 800～700 年ごろを境にアンデス全体で徐々にトウモロコシの利用が増えていったということを明らかにした。また、地質によって異なるストロンチウム同位体比を利用することで遺跡周辺にいつごろリャマ飼育地が増えたのか、飼育地どうしの交流はあったのかを検証し、アンデス地域における資源開発や資源利用の変化などを調べている。

これらの研究手法は日本では骨考古学や同位体生態学と呼ばれていて、研究者はそれほど多くないが、南米やアメリカでは多くの研究者がいて、考古学者が同位体分析も行うことが多いそうである。「南部南アメリカの考古学と安定同位体ワークショップ」が今年 4 月にアルゼンチンで開催され、エクスカージョンの参加者は 38 人のうち女性は 22 人で男性よりも多かったそうだ。瀧上氏は 2017 年の同会議でアルゼンチンの女性に、「なぜ日本人の論文は 9 割くらいが男性なのか？」と質問され、また別の女性には「日本の女性は結婚すると家庭に入るから研究をやめるのでしょうか」とも指摘されたことが非常にショックで、何が何でも研究を辞めてはいけなと心に誓ったそうである。海外のワークショップでは女性比率が半分以上と高く、環境が大きく異なると感じているそうである。古代アンデス研究では日本調査団で学んだペルー人考古学者が男女共に増えていて、それに伴って現地調査に参加する日本人女性学生も増えているという現状があり、少しずつ男女比率の改善やダイバーシティの広がりを実感していると報告されていた。

また、このように活発に研究活動を行う女性研究者はタフだと見られがちであるが、瀧上氏自身はパワフルな研究者というわけではなく、現地で何度も救急外来を利用しており、3～4 年に 1 回は病院に行く病弱な研究者として認知されているそうである。体調を崩しやすいメンバーが調査団に参加していることで、若手学生も相談しやすいチーム、あるいは無理をしない研究計画を立てられるような雰囲気を作ることに貢献できれば良いと思いながら活動していると述べていた。

近年はどの分野でも中堅から若手では男女を問わず子育ての当事者意識が高まっていて、主体的に子育てをしている男性研究者、育休を取る男性研究者が周りでも増えているとのことである。しかし、瀧上氏のように乳幼児を残してペルーに行くとなると、保育園や義実家では奇異な目で見られるところもあるそうだ。理解者がいないと辛いので、先輩や同年代の似たような立場の研究者と話しながら、情報共有しながら努力していくのが大事だと話された。また、いろいろな分野に所属することで視野が広がり、多様な方法を知ることができ、自身の気持ちも軽くなる。多様性のある調査隊を作っていくため瀧上氏が好事例になれ

るように今後も努めていきたいと思って活動しているそうである。

(記録：日本応用数理学会 中口悦史、磯島 伸)

講演 2

「激変する極域：多様なアプローチの必要性」

猪上 淳 氏

情報・システム研究機構 国立極地研究所 准教授

国立極地研究所准教授の猪上淳氏から「激変する極域：多様なアプローチの必要性」というタイトルで、北極・南極でのフィールドワーク及びその研究活動の中での男女共同参画の取り組みや家族との関わり方について紹介があった。

猪上氏は2002年（当時は学振PD）にコロラド大学に滞在している。そのとき、北極の研究をされていた女性研究者である Judith Curry 教授に出会い、Judith Curry 教授のフィールドワークプロジェクトで得られたデータを解析する研究に携わった。その最中に Judith Curry 教授とその夫の熱帯の有名な研究者がジョージア工科大学に夫婦揃って雇用されるという人事があり、海外の大学ではこのような大きな人事があるということを身近で経験した。

猪上氏はその後、2003年にジョージア工科大学、2004年～2011年に海洋研究開発機構、2012年に国立極地研究所に就職してから現在まで、北極観測・南極観測などの研究に従事してきた。それらの活動の中での男女共同参画の取り組み、家族との関わり方についても多く紹介されていた。国立極地研究所には育児休業を取る方が少なかったが、2016年に猪上氏の妻が産休・育休を終えた後、それに続くように猪上氏も3ヶ月の育児休業をとり、妻が学位取得に専念できるように家庭内の家事・育児をすべて担当した。国立極地研究所の男女共同参画推進室員、ハラスメント相談員をされ、日本気象学会大会実行委員として保育支援担当を行ったり、地域の活動として豊島区地域子供懇談会委員などとして活動をしたりしている。制度の利用経験としては、育児休業取得やベビーシッター派遣事業割引券や学童保育料の補助などが挙げられる。日本気象学会における男女共同参画の取り組みには、女性会員の集い、ワークライフバランスを考える会、女子中高生への働きかけ、保育支援があるが、このような活動は学会の中でも増えてきていると報告されていた。

今年は、昨年11月に東京から南極観測船「しらせ」で昭和基地に行き、3月に戻り、8月には再び海洋地球研究船「みらい」に乗り、北極へ行き10月に戻ってきている。2023年の北極航海では研究員40名（うち女性15名）、外国人7名（うち女性5名）が乗船していた。北極、南極の氷の減少に関する研究の説明があり、北極では2050年には最も氷が減少する9月には全く氷がなくなることが予想されていることが説明された。気象に関するフィールドワークではバルーンを飛ばしたり、船上でドローンによる気象観測をしたりしている。ドローンによる鉛直方向1100mまで観測や雲の粒を観測する特殊なセンサー付きのバルーンを飛ばすことによる気象観測などを行った。北極海の水氷減少が雲の生成に与える影響や雲の温暖化に与える影響が分かってきている。

このような極地へのフィールドワークは一度の研究プロジェクトの期間が長期にわたり、その期間多様な研究者が閉鎖空間で共同生活を行うことになるためハラスメント対策が重要となる。そこでこれらのプロジェクトではハラスメントに該当する行為を定義して全体に共有し、相談員を設置し、だれにどのようなフローで相談をすればよいのかを事前に説明するなどのハラスメント対策が行われている。

多様性に関しては次のようなことが挙げられていた。最近の北極域研究では、文理融合が積極的に行われている。北極海に面している国々の人の生活と北極の変化の関係を研究するプロジェクトが行われており、今後も計画されているが、そこでは人文社会学的な側面が重要になってきている。自然環境・生態系の急激な変化や領土・領海、国際法整備・経済活動の活発化の関係が研究され、先住民との関わりも重要視されてきている。中高生の地球温暖化や北極に関する理解のために、ボードゲームを使って、出前授業なども行っている。ボードゲームの英語版も作り、日本の取り組みに関しても「みらい」の中でも行った。観測隊の中での文化交流も大事にしており、けん玉を持っていくと多くの海外研究者に興味を持ってもらえた。

国際プロジェクトの多様性を示すものとして、Polar Prediction Project が挙げられていた。現在、地球全体の観測データすべてを用いて天気予報が行われている。この世界気象機関のプロジェクトでは、現在北極のデータが少ないが、もし北極のデータを増やしたら、どのくらい予報精度が向上するかを実験した。プロジェクトには若手や女性が多く、会議の開催地も世界各地を回って行われるなど、様々な多様性への配慮が行われていた。また、学際的なプロジェクト MOSAiC では女性の登用や若手の育成にも考慮してプロジェクト運営がされていたことが紹介された。国際北極科学委員会でも多様性を考慮した活動が増えてきている。

最後のまとめの中では、観測現場で得られるインスピレーションは研究の原動力になるので大事にしていること、フィールドワークにおける「十分な準備」と不測の事態への対応」が必要で、これは家庭や育児にも対応するところがあること、また、いろいろな研究者との交流で研究に深みができると述べられていた。

(記録：日本応用数理学会 岩崎 悟、今井桂子)

講演 3

「米国における女性科学者台頭の半世紀」

北島 薫 氏

京都大学農学研究科 教授

3 番目の講演は北島薫氏による「米国における女性科学者台頭の半世紀」である。北島氏は現在、京都大学農学研究科・副研究科長、日本生態学会・副会長（来年度会長）、日本学術会議・第二部会員である。東京大学を卒業後にアメリカに留学し、2013 年に京都大学教授となるまでの 29 年間をアメリカをベースに、フィールド研究者として活動してきた。「日本の中には見えないものが見えるようになる」というご講演冒頭の言葉が印象的であった。

北島氏の専門は熱帯生態学研究であり、1985 年の大学院生時代にパナマの中央に位置するバロコロラド島で森林樹木の機能的多様性の研究を始めた。ポスドクや若手研究者としてフィールド研究にご自身のお子様を帯同されたこともある。世界ではずっと女性の権利が日本よりも認められていたような感覚もあるかもしれないが、100 年前はこのバロコロラド島で宿泊を許されたのは男性研究者のみで、女性は昼間に宿泊せずに訪問するだけという時代があったことが紹介された（1924 年スミソニアンデジタルアーカイブからの写真参照）。しかし、女性研究者の社会的地位は、アメリカでもこの半世紀程に変貌したといえる。北島氏は 2016 年に国際熱帯生物保全学会 ATBC (Association for Tropical Biology and Conservation) の会長として、同学会や欧米のフィールド科学の歴史の中での女性研究者の立場などについての調査を実施した。まず、科学研究のために熱帯のフィールドワークを初めて企画実行した研究者は Maria Sibylla Merian 氏 (1647-1717) という女性で、その肖像画はドイツで切手となるほどドイツでは著名である。Merian 氏は 52 歳のときに自身の娘を伴いスリナムに行って研究し、チョウやガは土の中から自発的に生まれてくるのではなく、植物の葉を食べて芋虫からさなぎをへてチョウに変わる変態（メタモルフォシス）を明らかにし、生物多様性科学の基礎になる仕事をした。Merian 氏は Charles Darwin 氏 (1809-1882) の祖父である Erasmus Darwin 氏 (1731-1802) にも影響を与えたり、その C. Darwin 氏から続く進化生態学・個体群生態学・熱帯生態学のアカデミック系統樹に連なるのが北島氏の指導教員である Carol K. Augspurger 氏である。女性の指導教員 Augspurger 氏に出会えたことは北島氏に大きな影響をあたえたそうである。次に、Augspurger 氏の指導教官であり熱帯生態学分野で著名な研究者である Daniel H. Janzen 氏が北島氏ご企画の国際学会 ATBC の 50 周年の会で基調講演をされたときのスライドを示しつつ、1960 年代のフィールドワークは基本的に男性で寝泊まりをして進めるスタイルであり、同学会結成時の 1962 年にジャマイカで開催された会合にでは男性に交じって女性が 1 人だけだったことなども紹介された。続いて、国際学会 ATBC での女性評議員比率をプロットしたグラフが示され、1986

年に女性評議員はゼロだったものの、女性研究者の数が増えるにつれて評議員になる女性が増え、1988年に初めて女性の会長が就任して以来、2016年に会長になられた北島氏を含め、何人もの女性会長が活躍してきた。2016年の評議員会の記念写真が示され、約半数が女性であり、女性が思い思いの服装で参加している様子が紹介された。歴史を振り返ると、アメリカのフィールド系女性研究者を時代背景と共にいくつかの世代区分することができる。1950年代はアメリカでも「女性は家に居ておとなしく主婦をしよう」といった時代であり、それから間もない1960年代は上述したように女性研究者は少数でまさに黎明期といえる。1970年代は北島氏の指導教員 Augspurger 氏が博士課程を過ごしていた頃で、女性研究者がどんどん増えた時代であるが、当時は「男並みに仕事ができる」ことを意識した服装をすることがあったそうである。1980年代になると、結婚・子育てを横に置いてキャリアを最優先に研究を追究する女性研究者が現れ、女性研究者の道を切り開いていった。この頃になると、女性研究者の服装にも自由度が生まれ、学会でドレスを着る方もいたそうである。漸く1990年になると、ワークライフバランスの話が登場する。アメリカでも当時は配偶者のポストについて苦労して交渉せねばならない状況にあり、1990年代には配偶者とのスプリットポジションや配偶者への大学内でのポスト提供へと至る例が見られるようになり、また、母親業と研究活動が両立できることも広く認知され、女性研究者が「地でいられる」ようになったそうである。欧米では2000年には研究者人口に占める女性がほぼ半数となったものの、現在もまだ給与格差などの問題が残されているほか、バイアスはいまだに残されており、学生からの授業評価や世話係などを女性研究者が頼まれやすい傾向は残されているとのことであつた。日本より女性の社会的地位については先を進むアメリカではあるものの、セクシャルハラスメントについての声が聞いてもらえるようになったのは、#me too等の普及もあり、2020年頃からとごく最近のことであり、北島氏は「まだまだ努力は続く」とお話されていた。2013年にNatureに発表されたHelen Shen氏による論文”Inequality quantified: Mind the gender gap”は今日までに262回引用されており、この論文で指摘された傾向は今も続くものが多い。まず、博士号を持つ女性の数は科学工学分野で着々と増加しており、特に生命科学分野での女性研究者の増加は著しい一方で、定職よりポスドクの方が女性研究者の割合が高く、女性の方がパートタイムの職に就くことが多いなどの問題を抱えている。また、アメリカの女性の割合は若手ではほぼ半分であるものの年配になるとかなり少ないという問題もあるが、この女性の割合の差はヨーロッパではアメリカより大きく、日本はヨーロッパ以上に大きな格差となっている。同論文では男女の給与格差についても言及されており、特に生命科学分野では女性が多いにも関わらず給与格差はより大きいそうである。この給与格差がおこる理由について、先の論文と同じ著者であるH. Shen氏が2016年に論文”Why women earn less: Just two factors explain post-PhD pay gap”をNatureに発表しており、女性の方が学位取得後の給与が低い分野に行く傾向が高いこと（家族の事情を優先している可能性あり）、子育てする女性研究者は子供のいない女性より給与が低い、男性では子育ての有無による格差はないことの2点が論文で指摘された。関

連して Matilda Effect としてしられる、新しいアイデアや発見が女性であっても男性の同僚の成果として歴史に残ることが多い現象もある。また、ブラジルの生態学会の調査では、女性の生態学者はアカデミックラダー（昇進）から落ちがちである旨が報告された一方で、Cameron 氏ら（2016）やこれに続く Huang 氏ら（2020）の研究で、アクティブに研究している期間に限定しかつ自己引用を除去したうえで 1 年あたりの出版数を比較するとほぼ男女格差はないという統計解析がなされたことが示された。

以上を踏まえ、北島氏は講演後のパネル討論を見据えた講演のまとめとして 4 点を指摘した。1 つ目は「遠慮をしない」で、自分の成果を遠慮なく続きの仕事で自己引用すること、また自分の貢献を適切にみとめてもらうこと。2 つ目は「みんなで尖ろう」で、現在の悪循環（女性が少ない→ロールモデルが少ない→研究者を断念→女性が少ない→…）を断ち切って、先輩や近くの女性研究者と連携するために女性研究者の絶対数を増やすこと。3 つ目は「疲れてやめてしまわない」こと。研究ギャップがあることは悪いことではないとデータで証明されているので、お休みの期間があっても戻ってこられる環境づくりが大切だが、残念ながら日本では雇用における契約の柔軟性が不十分なこともアメリカから遅れてしまう要因の 1 つである、と北島氏は指摘した。4 つ目として「シニアは、私たちの頃はこうだったという先入観を若い人に当てはめようとしない」と述べて、北島氏の講演が終了した。

（記録：日本応用数理学会 森山園子、石田祥子）

パネル討論

パネリスト：瀧上 舞 氏、猪上 淳 氏、北島 薫 氏、宇野 裕美 氏

ファシリテーター：三宅 恵子 氏（名古屋大学 特任講師）

パネル討論は、瀧上舞氏（国立科学博物館 研究員）、猪上淳氏（国立極地研究所 准教授）、北島薫氏（京都大学農学研究科 教授）、宇野裕美氏（北海道大学大学院地球環境科学研究院 学振特別研究員）をパネリストとし、三宅恵子氏（名古屋大学 特任講師）をファシリテーターとして実施された。フィールドワーク分野には、長期にわたる調査地への渡航、天候等の様々なアクシデントに柔軟に対応、複数人で寝食を共にする生活の継続、安全面への配慮といった他分野には見られない特性がある。第21期幹事学会である日本生態学会にはフィールドワークを行う研究者が多いことから、フィールドワーク特有の問題を明らかにするために同学会でアンケートを実施した。パネル討論では、このアンケート結果をもとに、フィールドワーク分野で誰もが能力を発揮し輝くための方策について議論を行った。アンケート結果から、論点は「フィールドワークでの困りごと」、「ライフプランとキャリアの両立に関して」、「ダイバーシティの価値と難しさ」の3つに絞られた。

第一の論点「フィールドワークでの困りごと」について、アンケート結果では、体力的問題や月経など異性のリーダーに相談しにくいことが多い、身体的セクハラや性的役割分担に関する無意識のバイアスが露見しやすい、ハラスメントへの不安が原因でフィールドワークへの参加を躊躇断念するといった意見が寄せられていた。パネル討論では、パネリストの猪上氏から、南極の調査船で実施されたハラスメント対策として、ハラスメント対策の相談員の所在を明らかにすることで相談しやすい環境づくりを行ったこと、指導教員と学生が一緒に乗船する場合はアカデミックハラスメントに配慮した部屋割りにしたことが紹介された。また、パネリストの北島氏からは、アメリカの生態学会や森林学会でダイバーシティ宣言が行われており、ハラスメントは許されないかつ見過ごさないといった空気が共有されていることが紹介され、大学だけでなく、学会などがそのような宣言をすることが意味のあることであると指摘された。アメリカに関連してパネリストの宇野氏から、日本と異なりアメリカでのフィールドワーク分野は男女比が半々程度であり、そもそもハラスメントが起りにくい環境であることなどが紹介された。最後に、ハラスメントを未然に防ぐことやハラスメントに直面したときの対応など、能力を発揮するためには心理的な安全性を確保した環境整備が重要であることが全体で共有された。月経などを言い出しにくいということに関しては、実習や調査の申し込み時に配慮事項を記載できるようなフォームづくりを進めるなど、コミュニケーションの在り方を具体的に見直し今後も改善する必要があると述べられていた。

第二の論点「ライフプランとキャリアの両立に関して」について、アンケート結果では、夫婦が近隣で安定した職を見つけることが困難である、結婚・出産のタイミングと研究者と

してのキャリアの両立が難しい、子育て期に宿泊を伴うフィールドワークを行うことが難しい、女性に加え若い男性も苦勞している、キャリアとライフプランの両立が難しく一方を断念せざるをえないといった意見が寄せられていた。パネル討論では、キャリアとライフプランの両立について、パネリストの瀧上氏から自身のペルーの調査研究が紹介された。複数人で綿密に計画をたてて渡航するため突然の休養は言い出しにくいこと、瀧上氏自身はコロナ禍で渡航できなかった時期があったことで出産できたものの一般的には若手が出産を検討するには厳しい環境であることが紹介されたほか、任期付き研究員の場合は育休をとれない場合があり、保育園など子育て支援の制度設計の対象が定職に就いている人に偏っていないかという問題点が挙げられた。育休に関連して、宇野氏からは、フィールドワークは何年にも渡ってデータをとり続けることが重要であるものの、育休中に科研費が使えないことでキャリアが中断されることから、融通の利く制度の必要性が訴えられた。また、北島氏からは、子育てでは無理なく臨機応変に対応することが重要であり、場合によっては一時的に研究を休むことも一つの選択肢となりうるのではないかとの意見が出された。続いて、男性の育児休業については、実際に育児休業を取得した猪上氏から経験談が紹介された。育休取得に向けて大学院の講義や研究指導を前倒しにするなど調整をしたことや、自身の育児休業取得後に育児休業を取得する男性が増え結果としてロールモデルとなったことなどが述べられた。男性が実際に育児休業を取ることの重要性も指摘された。宿泊を伴うフィールドワークの難しさについては、瀧上氏と猪上氏から長期出張の際の具体的な対応策と問題点が紹介された。また、北島氏からは、子育ては不測の事態の対応が求められることから、親からの援助が難しい場合は、職場で同じ状況にある大学教員や母親などのネットワークを日頃から意識して作っておくことの重要性が指摘された。加えて、調査や学会への子どもの帯同についても、子ども自身と一緒に行く意志がない場合は子どもの意志を尊重して、場合によっては子どもを友人宅に預けて参加したり、親が思い切って予定をキャンセルしたりすることも一案であるという意見が出された。続いて、夫婦で近隣に安定した職を見つけることの困難さ、いわゆる「同居問題」について議論が行われた。本問題については男女共同参画学協会連絡会がシンポジウムや要望書の中で繰り返し強く要望してきた経緯がある。北島氏より、アメリカではスプリットポジション、ジョイントポジション、デュアルハイヤーと10年くらいで変化した。これらの制度が一気にできたというよりも、徐々に交渉を重ねて先例を作ってきたとの指摘があった。日本で進まない理由について北島氏は、アメリカの場合は部局長が様々なことを采配する決定権を有しているため雇用者からの具体的な交渉が可能となるものの、日本の場合は交渉をするための決定権の所在が不明で、柔軟なポスト運営が困難になっており、交渉を可能とする枠組みを日本でも作るべきであるという意見が出された。また、同じく北島氏より、日本では男性の育児休暇取得と同様に先例があると後に続くのではという期待が寄せられた。

第三の論点「ダイバーシティの価値と難しさ」については、アンケート結果では、性別・人種・文化など様々な側面で多様性の価値を感じつつも業務が多い中で対応が難しいとの

声や、多様な文化に触れることを通して男女共同参画に刺激のあることも多いといった意見が寄せられていた。パネル討論では、北島氏と猪上氏から国際化を進めるうえで英語のできる職員を積極的に配置するなど英語化が必要である旨の意見が出された。

最後に、日本生態学会が実施したアンケートに寄せられた必要な支援策のうち、半数以上が必要であると回答した次のような支援策が紹介された。

- フィールドワーク環境整備
 - ガイドライン作成（ハラスメント防止・無意識のバイアス理解など） 68%
 - 実習や調査の申込時に、参加者が配慮してほしい事を申し出るしくみ 62%
 - 多様なバックグラウンドをもつ教員や実習補助者の配置 56%
- フィールドワークと授業・運営業務の両立
 - 長期調査を可能にする授業・運営業務分担の調整 88%
 - 調査先からの会議・授業（リモート会議・オンデマンド授業）の推進 83%
- 妊娠と子育て
 - 調査時の託児補助 73%
 - 実習担当の免除または日程考慮、調査参加の機会均等化 69%
 - 調査参加の機会均等化 60%
 - 調査同行者（調査補助者）の配置や託児補助 58%
- 就職支援
 - 学会で求職中をアピールする機会の提供 71%
 - 求職者への現地調査スタッフとしての雇用機会の提供 58%
 - デュアルキャリア雇用支援（帯同雇用制度） 51%
- ダイバーシティー推進
 - 英語・外国語を使用できる事務職員の配置 74%
 - 大学や研究機関での相談窓口の設置 70%

最後に、各パネリストから最後の一言が述べられ、フィールドワークでは大変なことは多いが研究は楽しいので、仲間を作り、声を上げて必要な制度を作っていこうということが共有され、パネル討論が終わった。

（記録：日本応用数理学会 森山園子、今井桂子）

第22期幹事学会 挨拶

速水 謙 氏

一般社団法人 日本応用数理学会 会長

国立情報学研究所 名誉教授

日本応用数理学会は、第22期男女共同参画学協会連絡会の幹事会を引き受けることになりました。当学会は、日本における応用数理的な研究、産業、教育等に関わる活動を支援し、ともに活動していくために、1990（平成2）年4月に発足し、2012（平成24）年7月に一般社団法人に移行した学会であります。本学会会員の専門分野は数学、物理、化学、電気・電子、機械、材料、建築、情報処理、通信、計測・制御、システム工学、人間工学、経営、等々極めて多岐にわたっており、学際的に異分野の第一線の研究者や技術者が集まり、応用数理を研究、産業、教育に結び付けるための研究開発と普及、会員相互の連携・親睦、国際的な交流を積極的に行っております。

当学会は現在会員数約1,400名で、女性会員は約90名（6.4%）です。個人的な印象ですが、私の研究分野では、欧米（例えば、米国、イタリア）、中国は女性の研究者が多数活躍されているようです。また、2023年8月20-25日の間、当学会他の主催で早稲田大学において開催されました国際応用数理会議（ICIAM 2023 Tokyo）には世界中から5,500人あまりの参加がありましたが、女性の参加者も多く、活発な研究発表をされていました。当学会においても女性会員がますます増え、活躍されることを切に願います。それがまた、学会の健全な成長につながると信じます。

当連絡会での活動を通して他学会での取り組みから学び、協力し合いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム資料集より転載）

第22期委員長 挨拶

今井 桂子 氏

一般社団法人 日本応用数理学会

中央大学理工学部情報工学科 教授

一般社団法人日本応用数理学会は、第22期の幹事学会をお引き受けすることになりました。私は、委員長を拝命する予定になっております、今井桂子と申します。この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

日本応用数理学会は、日本における応用数理的な研究、産業、教育等に関わる活動を支援し、ともに活動していくために、1990年4月に発足し、2012年7月に一般社団法人に移行した学会です。2014年に男女共同参画学協会連絡会に正式加盟し、2016年秋からは、9月の年会および3月の研究連合発表会において、若手・女性研究者を中心としたランチミーティングを行い、情報交換を行ってきました。会員数約1,400名で、女性会員は約90名であり、会員数も女性会員の数もあまり多いとは言えませんが、2017年秋には、国際応用数理会議（ICIAM）との連携において、11月に台湾で開かれた Gender gap project にも参加する等、国内外で男女共同参画に積極的に取り組んでいます。

男女共同参画学協会連絡会との関連においては、女子中高生進路選択支援ワーキンググループの行っている活動である「女子中高生夏の学校」（以下夏学）に2014年、そのとき日本応用数理学会副会長であった私が実行委員として参加しました。それ以来、日本応用数理学会は毎年ポスター展示を行い、女子中高生のキャリア相談にも対応してきています。また、実験・実習に参加した年もあります。2021年にオンライン開催となった夏学では私が実行委員長を務め、オンラインでの実験・実習やキャリア相談を行いました。連絡会の多くの皆様に、例年とは異なる環境での開催にご協力頂きましたこと心から感謝申し上げます。社会で、特に科学技術分野において女性が活躍する環境を整え、指導的な役割を担う女性を増やすためには、小学生のころからの生徒たちを取り巻く環境の整備も必要なのではないかと、夏学を通して、また6年間高等学校校長を兼務しました経験からも感じております。

皆様のお力添えを頂き、科学技術分野における男女共同参画やダイバーシティ推進のために、幅広い活動を行ってまいりたいと思います。第21期幹事学会の日本生態学会様から幹事学会としての任務をしっかりと引継ぎ、第23期の幹事学会の日本森林学会様に無事に渡すことができるよう、これから1年間第22期の幹事学会として努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム資料集より転載）

大坪久子先生メモリアルコーナー

2023 年 7 月 30 日にご永眠なされた本連絡会名誉会員の大坪久子先生を偲び、「大坪久子先生メモリアルコーナー」を 21 期シンポジウムポスター会場に設置しました。メモリアルコーナーでは、大坪久子先生の数々のご業績を紹介するとともに、本連絡会ホームページの「無意識のバイアスコーナー」を紹介するポスターを展示しました。

なお、大坪久子先生のご業績については、本シンポジウム資料集※の「提言・要望書 WG 活動報告～大坪久子先生を偲ぶ～」に掲載されています。

※https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2023/21st_symp_shiryoshu_231015.pdf



大坪久子先生メモリアルコーナー 第 21 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム
(於：東京大学弥生講堂 2023 年 10 月 14 日)

ポスター発表 参加一覧

加盟学協会（学協会 ID 順）

002 化学工学会	024 地球電磁気・地球惑星圏学会
003 高分子学会	030 日本地球惑星科学連合
006 日本化学会	032 生態工学会
007 日本原子力学会	036 日本建築学会
009 日本女性科学者の会	037 種生物学会
010 日本植物生理学会	044 日本技術士会
011 日本数学会	045 日本植物学会
013 日本生態学会	059 日本内分泌学会
014 日本生物物理学会	063 日本熱帯生態学会
014 日本生物物理学会	153 軽金属学会
015 日本生理学会	162 日本水産学会
016 日本蛋白質科学会	
018 日本動物学会	
021 日本物理学会	
023 日本森林学会	

ワーキンググループ

提言・要望書WG（大坪久子先生メモリアル）
女子中高生理系進路選択支援WG

大学等

広島大学
北海道大学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部
東京女子医科大学
内閣府原子力委員会

シンポジウムの写真1



幹事学会挨拶 宮下 直(一般社団法人日本生態学会 会長)



歓迎の挨拶 林 香里(東京大学 理事・副学長)



ご来賓挨拶 岡田 恵子(内閣府男女共同参画局 局長)



ご来賓挨拶 山下 恭徳(文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官)



「生態学会員を対象にしたアンケート結果報告」
宇野 裕美(北海道大学大学院地球環境科学研究院
学振特別研究員)



講演1「アンデス文明研究と多様性」
瀧上 舞(国立科学博物館 研究員)

シンポジウムの写真2



講演2 「激変する極域：多様なアプローチの必要性」
猪上 淳(国立極地研究所 准教授)



講演3 「米国における女性科学者台頭の半世紀」
北島 薫(京都大学農学研究科 教授)



パネル討論



第21期活動報告 半場 祐子(男女共同参画学協会
連絡会第21期運営委員会 委員長)



提言・要望書WG 平田 典子 委員長



大規模アンケートWG 三宅 恵子 委員長

シンポジウムの写真3



ホームページ検討WG 裏出 令子 委員長



女子中高生理系進路選択支援WG 森 義仁 委員



次期幹事学会からの挨拶 今井 桂子(一般社団法人日本応用数理学会)



ポスターセッション



第22期幹事学会（日本生態学会）のタスクフォースメンバー



大坪久子先生メモリアルコーナー

第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム担当者・記録

【担当】

第21期幹事学会一般社団法人 日本生態学会

委員長 半場 祐子（京都工芸繊維大学）

副委員長 三宅 恵子（名古屋大学）

副委員長 可知 直毅（東京都立大学）

委員 Hubert Cheung（東京大学）

堂圀 いくみ（東京学芸大学）

藤田 剛（東京大学）

久野 真純（京都大学）

本郷 峻（京都大学）

池本 美都（弘前大学）

Firouzeh Javadi（九州大学）

三谷 曜子（京都大学）

満行 知花（高知大学）

谷口 裕美（東海大学）

曾我 昌史（東京大学）

宇野 裕美（北海道大学）

第22期幹事学会一般社団法人 日本応用数理学会

委員長（予定）今井桂子（中央大学）

【記録】

午前の部 一般社団法人 日本森林学会

久保田多余子（森林総合研究所）

午後の部 一般社団法人 日本応用数理学会

石田祥子（明治大学）

礪島 伸（法政大学）

今井桂子（中央大学）

岩崎 悟（大阪大学）

中口悦史（大阪大学）

森山園子（日本大学）



第21期 男女共同参画学協会シンポジウム報告書

2023 年 11 月 30 日発行
一般社団法人 男女共同参画学協会連絡会
<https://djrenrakukai.org/>

[禁無断転載] 本誌に掲載する著作物を転載または引用する場合には、掲載する刊行物に「第 21 期男女共同参画学協会連絡会シンポジウム報告書」から転載または引用した旨をご付記くださるようお願い申し上げます。

イラスト：谷口裕美（東海大学）



第21期 男女共同参画学協会 連絡会事務局



一般社団法人

日本生態学会

The Ecological Society of Japan